

# おはなし

## いたづら鳥

鳥の勘三郎は綺麗な羽と美しい聲の持主です。

毎日高い枝の上であつちこつち飛び乍ら自慢そうに、うたつたり、飛んだりして居ります。

けれ共それはくいたづら者です。

三毛猫が日當りのいゝ縁側に居りました。その中いゝ氣持になつてたうく眠つてしまひましたのに、勘三郎は、手水鉢のひしやくに水を一ぱい入れて、脊中から、ザアとかけました。猫がびつくり、ニャオーンと恨めしそくに、逃げて行く鳥をにらみました。

お池の金魚が、綺麗な水の中で泳いで居ます。光子さんにいたゞいた圓い麩をバクリと飲み込まうと思ふ間に勘三郎は嘴でヒョイととつてしまつて、赤い金魚の鰭をつつかうとしたので大急ぎで藻の間にかくれました。

東京女高師  
幼稚園保母

## 新城 よし子

鼻が此の頃少し右の眼が痛むので、目の玉を綺麗に洗つて屋根にほして置いたのを勘三郎は見つて轉がして、地べたに落して少しはしてしまひました。

雀が皆で一生懸命力を入れてチュッ／＼と、うたつて居るのに勘三郎は態と調子の外れた聲を出して邪魔をするので、どうしてもうたはれません。

それで皆がもう勘三郎を憎らしがつて、かたき打ちをしようと思ふのですが、如何していゝのか解りませぬ。皆で度々ツーツと勘三郎に見つからない様に、相談を始めましたが皆勘三郎にはかなはないものばかりです。漸く鼻が引うけて呉れました。

或る月のいゝ晩に疲れた勘三郎はグウ／＼眠つて居りました。鼻は持つて來た墨の壺の中に刷毛を入れて勘三郎の羽根を塗り始めました。鳥はびつくり一生懸命誰だ／＼とおこりますけれ共夜ですから眼が見えませんが、其中墨で塗られた體が冷くて、夜

風にあたりすつかり風邪をひいてしまひました。

翌朝起きて見たら、體は眞黒、そして風邪で咽喉を痛めて、今迄の様にいゝ聲が出なくなりやつとカア／＼といふだけです。

たう／＼鳥は眞黒／＼になりました。

一一、一一、六一

お猿さん

山で遊んで居たお猿がすつかり道を間違へて、人の住んで居る賑やかな町の方に來てしまひました。

是は大變、早くお山に歸らうと思ふのですが、どうしても道が解りません。それに、大變に元氣のよい、面白い猿でしたから、平氣ですん／＼町の方に來てしまひました。

自分のまはりを通る人達は皆著物を著て居ます。

洋服や、袖の長い著物や、又は袴をはいたり、兎に角自分の様な裸は一人も居りません。毛の一ぱい生えて居る體を見まはして、さすがに少しきまりが悪くなり、丁度洋服屋が見つかりましたので、一著當世流行のハイカラなのを作つて下さいと云ひました。人が違つて尻尾を入れるところが無いので、別に細長いシツポのズボンをこしらえて貰ひました。

ところが道を通る洋服著た人は皆ステッキを持ち煙草をふかして居るので、棒を拾つて杖のつもりで歩き、前の人が捨てた煙草の吹殻を拾ひ丁度來合せた電車に乗りました。車掌に叱られて煙草を大急ぎでポケットに入れたので大事の洋服を少しこがしてしまひました。

その中隣の小僧さんが飛び降りしたので、猿も今度は失敗せずに、それは／＼上手にとび下り致しました。

段々と歩いて居る中に猿の大好きな小さい坊ちゃんやお嬢さんが可愛い／＼洋服を著てバスケットを持つて幼稚園にいらつしやいます。つい面白くなつて一緒にはいつてしまいました。お子さん方は大喜び、猿もブランコや圓木に乗つたり、又皆さんが遊戲をなさる中にはいつたりしました。猿は眞似が上手ですから、ちつとも知らないのですけれ共先生のピアノに合せてなか／＼お上手に致します。

皆さんとお別れしてから今度は上野に參り、博覽會を見ようと思つたのですが、餘り方々歩いたのですつかり疲れてしまひましたので少し靜かな木のかげに休まうと思つて段々と奥の方に來てしまひまし

た。一寸氣がついて見ると、何だか鳥が澤山に居てその中お仲間の猿が澤山に騒いで居る處に來ました。

どんなに／＼嬉しかつたでせう。今迄人ばかり見て居たところになつかしい猿がキヤツ／＼と遊んで居るのですもの、たう／＼動物園の猿の中間に入れて貰ひ一緒に面白く遊ぶ様になりました。

大正、一、五、三〇、作。

### 不思議な毬

春子さんは遠い／＼お國からいらつしやいました叔母様に綺麗な絲で卷いた大きな毬をいたゞきました。幼稚園から歸りますと皆様に御挨拶をしてお菓子をしていたゞきそれからすぐに日當りのよいお座敷の縁側に坐つて毬をつき始めました。するといつもの軽い毬と違つて少し重い様です、それに何だかコトコトといふ音も聞えます。變に思ひ乍ら一つポンとつくごまあ不思議、どこから出たのか、綺麗な洋服が出ました。又ポンとつくご靴下、それからポンポン／＼／＼ついて居る中に帽子に外套、赤い靴、襟巻迄そこにズラリと並びました。

何と云ふ不思議な事でせう、その中に、そこに並

んで居る洋服や外套と同じものを著て、同じ靴をはいて居る小さい／＼人形がビヨンと出て來て、春子さんにおぢぎをして、

「これを皆春子さんにさし上げませう、このお靴をおはきなさい」

可愛い、聲でかう云つたかと思ふとビヨン／＼とダンスをし乍ら縁側から庭へ、庭から門へ、門から外へと行つてしまひました。あつけにとられた春子さんはすつかり見とれてしまつて、もつと人形と色色お話すればよかつたのにと思つたのですが氣がついた時はもう何も居りません。

兎に角人形の云ふまゝに、靴下をはき洋服を著帽子をかぶつて赤い靴をはきました、するとごまあ大變俄に體が軽くなつたかと思ふとお家の中に坐つて居られませんか。自然に足が地につかず、フワ／＼と體が動きます。縁側から座敷へ、茶の間へ、玄關へ、門へ道へ、町へ、たゞフワ／＼と、風船の様に體が動いてゆきます。電車も自動車も自轉車皆春子さんと駆つこして居る様です。賑やかな所、寂しいところ、たゞ／＼飛んで行きますと、段々お家がまばらになり煙が見えます。稻がみのつて居ます。柿が

おいしそうに熟してゐます、遠くの方から汽車が來ます、田舎に來たのです。

春子さんはすつかり疲れました。小川のほとりにしばらく休んで居りますと小さい流れが小唄をうたひ乍ら春子さんのそばを通つて行きます。やがてその川の中から前の小さい人形が出て來て、おいしいサンドウキツチと赤い林檎をくれました。それを食べますと又元氣ができました。そして自然に體が軽くなります。田舎道から段々賑かな町へ、又自動車、電車が走つて居ます。やがて元來た道に來たかと思ふと、お家の御門へ、門から玄關へ茶の間へ、たうたうお家に歸りました。するとまあ、俄に、體が重くなつた様です。氣がついて見ると、いつもく著て居る著物になつて居ります。

お茶の間には、お夕飯の支度が、ちやんと出來て電燈があかるくお室をてらして居りました。

一一、一二、三二

動物達が野原の真中の一軒家に多勢一緒に棲んで居ました。皆でそれく仕事があつて、今日は狸の御飯炊き、明日は鼠の御使番、狐や狸や猿は折々外

から、おいしい御馳走を持つて來たり、まづく皆仲よく暮しては居りますが折々喧嘩が始ります。いつも狐や狸は餘計に食べてしまつたり、折々はお掃除のおするをしたり、そして猫や鶏達をこき使つて使にやつたり臺所の後かたづけをさせたりして居ます。

或る日の夕方狐が

「おい／＼お前達は今夜は、人蔘のしつぽが澤山にあるからあれを煮てお上りよ、そして食べたらすぐに寝てしまふんですよ、私達は大事な相談があるの、なか／＼寝るところぢやない、あゝ忙しい／＼。」

かう皆にいひつけて食堂にはいつてしまつたのです。猫、鶏、鼠、犬等は仕方がないので、人蔘のしつぽで、こそ／＼とお夕飯をいたゞき、銘々の寢床に引込みました。けれ共いつも一緒に御飯を食べるのに今夜だけ別だと思ふと氣になつて仕方がありません。それに、どうやら、いゝ匂や折々瀬戸物の音なんかするのです。たう／＼猫はぬき足で食堂の入口に參りました。犬も鼠も鶏も、皆が一度に小さい鍵の穴から覗かうとして鉢合せしてびつくりしまし

た。

鼠「どうも今日はチウツとおかしい」

猫「ニャンだらう」

犬「ワンとおどかさうか」

鶏「それがこけつこう」

と又ソーツと臺所に行きました。

食堂では今日は小さいもの達が居ないので誠に結構さあ／＼思ひきり食べようぢやないか、と、テーブルの上には、スープや肉や、お菓子、果物などが一ぱい竝んでゐます。その中狼が怖い／＼お話を致しますので、皆始めは面白がつて居たのですが段々怖くなつてもうびく／＼して小さくなり乍らその怖い話を聞いて居る最中どーんと扉があいて、

チウ、ワン、ニヤー、コケコツコー

と飛びこんだものがあります。それを見ると可成り大きな怪物で、色々な足があり、恐ろしい道具を持つて居る様です。何しろ怖い／＼と思つて居るところですからよくも見もしないで、狐達が飛び出さうとすると、鼠があはて、居る皆の足をちよい／＼かぢるので大まご／＼窓からとび出してガラスでいやと云ふ程顔をうつたり、扉に突き當つたり鉢合せ

をしたり、兎に角皆逃げてしまひました。犬達は大喜びかぶつて居た毛布をすて、テーブルの上に竝んで居る御馳走を皆でいただきました。

一一一、一一一、一一三

とう／＼暮になりました。

淋しい人間が、淋しい事を氣がつかなくなるほど、あわたしさが、あつちからも、こつちからも、よせて來ます。

緊張した人々の顔に、つかれた人の額に、嬉しさうな笑顔に、裸になつた街樹の幹に、華やかな店頭の光があびせられます。

凧は山から下りて來ました。成人はち／＼み上つてふるふ、子供は木の葉をとばしてもらつて喜びます。お正月の來るのが嬉しくて、大きくなるのが嬉しくて、にぎやかなのが嬉しくて、嬉しい事が一ぱいではちきれさうになつてゐる私達の子供達は幸です。

チウリンゲンの森の子供達はどんなにして居るでせう。明るい新年が彼等の家をも訪れるように祈ります。(一一一、一一三)

複雑な知識は、虚偽の徴候である。

眞理は常に、單純である。

(トルストイ)